

根付かなかった要因の一つかもしれない。

それでは、この問題に関して、イエズス会総会長はどう考えていたのであろうか。

高瀬弘一郎氏によると、一五八五年十二月にヴァリニャーノに送った指令の中で、総会長は、日本イエズス会の生糸貿易を禁止している。しかし、二年後には貿易が最許可されており、その後、歴代総会長は基本的には日本イエズス会の生糸貿易を承認する方針をとった。やはり、現実的に考えて、貿易に依拠しなければ、日本での布教活動はままならないものであると総会長も認識したのであろう。

ヴァリニャーノは、来日二年目の一五八〇（天正八）年から翌八一年にかけて、白杵・安土・長崎で協議会を開いた。そして、八二年一月、彼は協議会の諮問に対して決裁を下した。この三ヶ所での協議会と決裁を集大成したものが、「日本イエズス会第一回協議会と、東インド巡察師A・ヴァリニャーノの裁決」といわれるものである。そこでの諮問第十三「日本の物質的維持のために努力しなければならぬ解決策」に、次のような記述がある。

諮問第十三 日本<sup>①</sup>の物質的維持のために努力しなければならぬ解決策

第一は、全員の意見はそれに一致したが、ローマで度々疑惑を抱かれ、否、総会長により我々が生糸に携わっている貿易を全面的に廃止せよと命ぜられたので、日本のパードレ全員の希望は、もし可能ならば、この生糸貿易その他の貿易をすべて廃止することである旨を総会長宛下に報告すべきである。第一の理由は、我々はそれが我々の誓願と会憲に違反することを知っていること、第二の理由は、極めて危険で不確実であること、多くの憂慮と労苦を伴うこと、そして他の方法による維持を獲得するほうが全員にとって善いからである。しかし、経費は多く定収入は皆無であるので、貿易を廃止し得る救済手段は、現

在のところない。したがって、イエズス会もキリスト教界も、現在のところ、他の手段によって維持することは不可能である。そして日本が他の手段によって補給を受ける前にこの貿易を廃止するならば、日本からパードレを奪いキリスト教界と改宗の問題をも放棄しなければならぬ。

第二の点は、これも全員が一致したところであるが、従来日本で収められたすべての成果およびそれを維持するためには、毎年少なくとも八〇〇〇クルサードは欠かせないということを総会長、教皇陛下、およびポルトガル国王にきわめて明確に知らせるということであった。：

第三の点は、これも全員の一致したところであるが、日本のイエズス会と全キリスト教界は物質的維持の不足のために滅亡するという極度の危険を、同じように教皇陛下、総会長、および国王陛下に知らせるということであった。イエズス会は中国から日本へもたらされる生糸に僅かな資産を投資して利益を得る以外には、日本になんら定収入を持っていないからである。：  
：全員は以下の結論を下した。すなわち、日本がさらされている深刻な困窮と危険に鑑み、利益をもたらしえる明白な救済手段となり且つ日本を救済すべき真の対策となるよう、巡察師自らローマへ赴いて総会長に現状をすべて説明し、また国王陛下と教皇陛下にも日本に対して何らかの対策を求めするために報告すること。なぜなら、教皇陛下と国王陛下は、日本の現実と現状に関する報告を受けた後で、適切な対策を必ずや巡察師にお与え下さるに違いないからである。巡察師が行けない場合には、日本の最も重要なパードレの中から一パードレをローマへ派遣して、上述の方々と総会長にこれを報告すること。  
この協議会が、八〇年から八一年にかけて、つまり、遣欧使節が出発する直前に開催されていることに注目したい。ここで議論されている内容は、次の三点である。

①もし可能ならば、この生糸貿易その他の貿易をすべて廃止することである旨を総会長宛下に報告すべきである。しかし、経費は多く定収入は皆無であるので、貿易を廃止し得る救済手段は、現在のところない。日本が他の手段によって補給を受ける前にこの貿易を廃止するならば、日本からパードレを奪いキリスト教界と改宗の問題をも放棄しなければならぬ。

②日本で収められたすべての成果およびそれを維持するためには、毎年少なくとも八〇〇〇クルサードは欠かせないということを経会長、教皇陛下、およびポルトガル国王にきわめて明確に知らせる必要がある。

③日本のイエズス会と全キリスト教界は物質的維持の不足のために滅亡するという極度の危険を、教皇・国王・イエズス会総会長に知らせなければならない。

以上の議論を経た結論は、巡察師自らローマへ赴いて総会長に現状をすべて説明し、また国王陛下と教皇陛下にも日本に対して何らかの対策を求めるために報告しなければならない、というものであった。

そして、諮問第十三に対するヴァリニャーノの裁決は、次の通りであった。

権威があり、それを十分に説明しすべて簡潔に果し得る人物を介して、国王陛下と教皇陛下にこのことをすべて詳細に報告すべきである。というのは、私が衷心から思っているところによれば、日本は物質面の不足から自滅するという極度に危険な状態にある。

ここでさらに遣欧使節に課せられた役割が明確になる。ヴァリニャーノは、国王・教皇・総会長に生糸貿易の存続を容認させ、更なる援助を得るために日本の現状を詳細に報告することを目的として、ローマに赴くはずであった。その際、日本での布教の成果を示すものとして、少年たちが選ばれて、ローマ教皇への謁見まで果た

したのであった。

ただし、ヴァリニャーノはイエズス会総会長の命により、インドのゴアで少年たちと別れ、自らローマに向うことはできなかった。そのため、ヴァリニャーノの意図することが十分に伝わらず、遠く異国の地から少年たちがローマを訪れ、教皇に謁見したことがクローズアップされる結果となった。

ヴァリニャーノは、総会長あての書簡で、次のように述べている。

今から八日前に、当地コチンにおいて私は、本年と同じ年の一月四日付け宛下の書簡を受け取った。その書簡の中で宛下は、菅区長職としてインドに留まるよう、私に命じられている。この命令を受けて、私は非常に困惑した。それには幾多の理由があるからである。：

私が「ヨーロッパに」赴こうと切望し、また「そうするよう」に「駆られている二つめの理由は、日本の維持のために、世俗的な救済策を手に入れることであった。というのも、その救済策がないために、かの地方「日本」のイエズス会とキリスト教界の全体が、著しい危機に陥っているからである。：

四つめの理由は、この日本人の少年たちを「ヨーロッパまで」同道してゆくことであった。というのも、少年たちが私と一緒に行くならば、彼らは私が切望していることの全てと、また特に日本の世俗的な救済策とを大いに助けてくれるであろう、との結論が下されたからであり、またそれは非常に確実だからでもある。：しかし、もし私が「ヨーロッパに」赴かないならば、どのようにして以上の事柄を首尾よく行なったらよいのか、私には分からない。：

ヴァリニャーノの困惑がよく伝わってくる文面である。この困惑ぶりからも、遣欧使節は周到な準備がなされたものではなかったことを読み取ることができる。イエズス会総会長やローマ教皇が、日

本から少年たちがヨーロッパに向かっていることをいつ知りえたのかは定かではないが、ヴァリニャーノが、総会長や教皇の了承を得て遣欧使節を派遣したのではないという事は確かであろう。

書簡の中にある「私が「ヨーロッパに」赴かないならば、どのようにして以上の事柄を首尾よく行なつたらよいのか、私には分からない」というヴァリニャーノの危惧は、結果的に的中した。総会長は、少年たちの訪問により教皇や国王から資金援助の約束を取り付けたので、生糸貿易は必要ないと判断し、一五八五年十二月に日本イエズス会の生糸貿易を禁止したので。

しかし、ヴァリニャーノは、ヨーロッパから日本に資金が送られてくることは、不安定かつ不確実であることを自らの航海の経験などから認識していた。だからこそ、総会長へ生糸貿易存続の必要性を訴え続け、二年後には貿易が最許可されたのである。ヴァリニャーノは、世俗的救済の必要性と、継続して生糸貿易を行うことを許可してもらうために、ローマに赴くことを計画し、その際に日本布教の成果を示すものとして何が最も効果的か考えた。その結果、日本を離れる直前になって、セミナリオで学ぶ少年たちを帯同することを選び、紆余曲折を経て、伊東マンシヨをはじめとする四人の少年が選ばれたのであった。

最後に、一五九〇（天正一八）年、島原半島の加津佐で開催された日本イエズス会第二回全体協議会から、遣欧使節についてマンシヨたちの帰国後、宣教師たちがどのように考えたかを見てみよう。

諮問第十四「ローマで研修のために日本人イルマン若干を派遣すべきか否か」において、次のような議論がなされた。

これはイエズス会の発展とイエズス会会則の完璧な保持及び本協議会で協議された諸理由により、ヨーロッパのパードレやイルマンと日本人との間の真の一致にとって、卓越した方法だとみなす点で全員一致した。

この派遣の実施は当然きわめて望ましいことではあるが、以下の理由により非常に困難である。第一の理由、きわめて長期、危険な行旅の距離の故に、少数のイルマンがこの行旅に派遣されるならば、かかる長期の間に容易に死亡しがちで母国語を忘れる可能性があるので無用だろう。：日本で最も優秀且つ期待される人物から選抜しなければならないので、日本に人材が極度に不足するであろう。

第二の理由、往復期間およびローマに滞在して研修しなければならぬ期間に学識を深めてパードレとなるには、少なくとも十二年ないしは十四年を必要とするであろう。：また彼らが帰国する折に役立つよう言葉を保持するのにも大きな支障が生ずる。なぜなら、日本語で巧みに説教し書簡を書きこなすためには、通常語る日常語を解さなければならぬだけではなく、日本の文学や書籍にきわめて困難な特別な研修をする必要があるが、然らざれば、資格もなければ名声も博さないのである。：彼らがローマから帰国後にこれを学ぼうと思っても、それはあり得ないことであり、期待され且つローマから携えるべき名声を抱いて帰ることはないであろう。

つまり、日本人をローマに派遣することが、日本におけるキリスト教の発展に寄与するものであろうという事に関しては意見の一致をみた。しかし、現時点においては、危険を冒して、長期間ローマに滞在して研修を積むことに、積極的な意義を見出すには至らなかった。航海が危険であることや、多額の経費を要するという理由ばかりではなく、人材の面においても適任者がいなかったのである。

ローマで研修し、その後帰国して教義をわかりやすく説教するためには、外国語ばかりでなく、日本語においてもきわめて高い能力を有していなければならない。この能力は、ローマに派遣されるまでに培っておかなければならないものである。母国語としての日本語の能力が高くない者を、いくらローマに派遣して研修を積ませて